

江戸川乱歩 未発表小説草稿

「ダアキン氏小瘤」翻刻および解題

落合 教幸

今回紹介する江戸川乱歩の原稿は、「ダアキン氏小瘤」と題された小説の冒頭である。これまでに紹介してきた「D坂の殺人事件」草稿、「人間椅子」草稿などと同じく、「EXTRAORDINARY」と書かれた大型の封筒に入っていた資料のひとつである。

四百字詰の原稿用紙に黒のインクで書かれている。使用されている原稿用紙を見ると「D坂の殺人事件」草稿（大正十三年執筆）で使用された二百字詰ではなく「人間椅子」草稿（大正十四年）で使用されたものと同じ四百字詰である。これを半分に折り、右上をこよりで留めた状態で保存してあった。現存するのは十三枚で、そのあとがどの程度書かれていたかはわからない。九枚目後半の書き直しをの

ぞけば、大幅な修正箇所は見られず、また他の草稿などと比較して、それなりに整った書かれ方をしていることを考えると、初稿ではない可能性が高いが、他にメモなどは残されていない。

「D坂の殺人事件」「人間椅子」の場合と異なり、「ダアキン氏小瘤」という小説が発表されることはなかった。別の題名で発表されたということもなく、類似する状況や表現が他の作品に流用されてもいないのではないかと思われる。

原稿の欄外には「大正十三年か十四年か」とある。この時期の乱歩は「D坂の殺人事件」草稿の解題でも述べたように、専業作家となる決意をし、雑誌「新青年」を中心としてつぎつぎと小説を発表していく。大正十四年新春増刊（一月）の「D坂の殺人事件」からはじまり、「心理試験」（二月）「黒手組」（三月）「赤い部屋」（四月）「幽霊」（五月）「白昼夢」（七月）「指輪」（七月）「屋根裏の散歩者」（夏季増刊・八月）と、ほぼ毎月書くという驚異的な生産性を発揮した時期であった。十月には「苦楽」に「人間椅子」も発表する。この「ダアキン氏小瘤」という小説もまた、これらの作品のひとつとして構想されたのだろう。

この小説は、横浜の商事会社につとめるTと云う人物

が、「私」に語った話であるというかたちで書き始められている。Tが東京での商談を終えた帰りに、夜の汽車で見た二人の奇妙な人物について描写される。ひとりは背の高い四十前後の紳士、もうひとりはその従者と思われる一寸法師である。そのふたりの外見とボソボソと話す怪しい様子が、乱歩らしい執拗さで描かれていく。紳士の耳は変わったかたちをしており、犯罪者の特徴ではないかと思われた。観察していたTは紳士がピストルを持っていることを発見するが、一寸法師もまたTが見ていることに気付いていた。一ヶ月後、Tはふたたび紳士と出会うことになる。今度は一寸法師ではなく、二十歳前の女性を連れていた。Tも知るカフェの女給だった。ここで原稿は中断する。

さて、この小説のタイトルになっている「ダアキン氏小瘤」(Darwinian tubercle)とは、現代では一般に「耳介結節」「ダーウィン結節」と呼ばれる、耳にある小さなふくらみのことである。これは進化の段階で、動物にあったものが、人間が内側に折れてできたとされる。イタリアの精神科医で犯罪人類学をつくりだしたロンブローゾは、調査した囚人にこの特徴が多く見られたことから、これを犯罪者の持つ特質と考えた。現在では一般人も同程度の割合でこの特徴を持っていることがわかっており、ロンブローゾの

説は誤りであることが知られている。

ハヴロック・エリス(1859-1939)は、イギリス人の医師で、性科学者としてその頃活躍していた。小説で触れられているのは、「犯罪に関する書物」という記述から見て「The Criminal」だろうか。乱歩の蔵書には、購入時期は不明だが、「The Criminal」(1914)や「夢の心理」(翻訳書・1914)などエリスの本が何冊もある。宮澤賢治が読んでいたことでも知られる「Studies in the Psychology of Sex」も乱歩は所持していた。今後はこういったものの影響についても見ていく必要があるだろう。

ランドルーという犯罪者については、乱歩の「双生児」も掲載されている。「新青年」大正十三年十月号に、小酒井不木が紹介している。結婚した女をつぎつぎと殺して死体を隠したフランスの殺人者で、その数は十一人におよんだという。その殺人鬼と紳士を重ね合わせるように書かれているが、当時の他の短篇の傾向からすれば、実はそうではなかったというように展開していく可能性も想像できる。

一寸法師という存在は乱歩作品に多く登場している。「踊る一寸法師」(大正十五年一月)は同じ時期に準備されている作品である。エドガー・アラン・ポーの「Hop-Frog」をもとにした「踊る一寸法師」では、陽気な人物で

あった一寸法師が、不気味なものへと変質する過程が描かれる。「ダアキン氏小瘤」での描かれ方は、異様さを強調したものとなっていて、むしろ、さらに後の「一寸法師」（大正十五年十二月〜昭和二年二月）での描かれ方へとつながっているようだ。

少し意外に感じるのは、この作品で横浜という地名が出てくることであろうか。乱歩作品に横浜が描かれることはほとんどなく、触れられるとしても伝聞の中であったり、単なる通過点としてでしかない。名古屋・大阪・東京と住居をつぎつぎと変えていった乱歩だが、横浜に住むことはなかった。この作品の続きが書かれていたら、乱歩は横浜をどのように描いていただろうか。

ちと丁次郎のすけを

ダアキン氏小瘤

江戸川 乱歩

横浜のある商事会社は勤めてゐる丁が、さうしてこんな張をした。

丁は高麗人には珍らしく、妙にエクセントリックな男で、様々の異様な嗜好の内にも、殊に犯罪が、つた事柄には、非常な興味を持ち、その方の素養も可也あつた。その点が私の好みに一致したからでもあらう、私は「まるで」商賣違ひの「にも拘らず、仲がよく、私は暇さへあれば」彼を「よく」訪問して「は」、奇怪な物語を聞くことを樂「し」んだ。これは、さうして丁から聞いた様々の話の内でも、殊に怪異な、謂はゞ探偵的興味に富んだものである。

もう四五五年になる、実に妙な話があるのだ。英語に「thrilling」といふ言葉があるが、正にあれだね。疎動的といつた方が、感じかしてツクリ来るぬ。

「」消してある部分
ぬりつぶしてある文字
「」挿入部分
□ 判読できなかった文字

ダアキン氏小瘤

江戸川 乱歩

横浜のある商事会社勤めてゐる丁が、嘗てこんな話をした。

Tは商賣人には珍らしく、妙にエクセントリックな男で、様々の異様な嗜好の内にも、殊に犯罪が、つた事柄には、非常な興味を持ち、その方の素養も可也あつた。その点が私の好みに一致したからでもあらう、私は「まるで」商賣違ひの「にも拘らず、仲がよく、私は暇さへあれば」

彼を「よく」訪問して「は」、奇怪な物語を聞くことを樂「し」んだ。これは、さうして丁から聞いた様々の話の内でも、殊に怪異な、謂はゞ探偵的興味に富んだものである。

もう四五五年になる。実に妙な話があるのだ。英語に「thrilling」といふ言葉があるが、正にあれだね。疎動的といつた方が、感じかしてツクリ来るぬ。

1 当時、僕は店の用件で、よく東京へ往復し
 2 たものだが、ある日のこと、春、といつて
 3 何か寒い時分なり。東京での仕事が大変お
 4 そくまつて、夜更けに、十時何十分、もう就
 5 と十一時おつた。新橋から汽車で横浜へ帰つ
 6 たことのある。そんな場合は、大抵東京で泊
 7 っている。この日は、翌早朝、横濱(に)用事を控えてゐたので、止むを得ず帰ることにした「の」だ。
 8 お話といふのは、その汽車の中から始まるのだよ。
 9 僕が乗つた「車」は、電車と同じ様に、向ひ合
 10 つて長いクツシヨンのついでに、二等車だ
 11 つたが、汽車が動き始めると、一等車と
 12 くと、僕が乗る車室の中間に、腰かけてゐる。二人の洋服を着た男が立つてゐる。「満員で」席がないのだね。
 13 一人は馬鹿に背の高い四十前後の立派な紳士で、もう一人は、その従者なのであらう、これは又、主人とは正反對に、
 14 「横に」ばかり太った「小人」一寸法師みたいな「若者」
 15 だ。その対照が如何にも滑稽で、いや、滑稽といふ以上に、二人の様
 16 子には、何かかう普通でない所がある様な
 17 気がしてね。妙に僕の注意を惹いたものだ。
 18 見てゐると、彼「等」は何がボソ／＼と、頻に話をして
 19 横に太った(ばかり)一寸

シツクリ来るね。

当時、僕は店の用件で、よく東京へ往復したものが、ある日のこと、「春」といつてもまだ寒い時分だつた。」東京での仕事が大変おそくなつて、夜更けに、十時何十分、もう殆ど十一時だつた。新橋から汽車で横浜へ帰つたことがある。そんな場合は、大抵東京で泊つて了ふ「の」「ことにしてゐ」だけれど、その日は、翌早朝横濱「に」用事を控えてゐたので、止むを得ず帰ることにした「の」だ。お話といふのは、その汽車の中から始まるのだよ。

僕が乗つた「車」は、電車と同じ様に、向ひ合つて長いクツシヨンのついてゐる「二等車」だつたが、汽車が動き始めてから、ふと気がつくと、僕が「丁」度車室の中間に腰かけてゐる、その五六歩ばかり向ふの「通路」に、二人の洋服を着た男が立つてゐる。「満員で」席がないのだね。一人は馬鹿に背の高い四十前後の立派な紳士で、もう一人は、その従者なのであらう、これは又、主人とは正反對に、「横に」ばかり太った「小人」一寸法師みたいな「若者」だ。その対照が如何にも滑稽で、いや、滑稽といふ以上に、二人の様子には、何かかう普通でない所がある様な気がしてね。妙に僕の注意を惹いたものだ。

見てゐると、彼「等」は何がボソ／＼と、頻に話をして

法師みない。其の對面か、如何にも滑稽な
で、いや、滑稽といふ以上、二人の相
には、何かかう普通でない所がある様
してぬ。妙に僕の注意を惹いたものだ。
見てみると、法師何かボソ／＼と、頼に死
を／＼する。普通に立つてゐると、互の
顔の位置が二尺も違ふやうで、一人は猫背にな
り、一人は背のびをして、堂に一寸法師の
方が、一生懸命に喋つてゐる。張聲は、車輪
の響は消さんとして少しも聞えない。たゞ、一寸
法師の、身体に如何にも大きな龍が、如何に
も片輪をらし、病的な表情で、クシヤ／＼
動くのが見えるやうだ。
その龍が又、実に変なんだ。若し暗闇で
あんまりよく見えてゐたら、さぞ凄いだらうと思ふね。彼は「一寸」
「度」電燈の眞下に立つてゐたので、たゞさへでこぼこ顔が、
蔭影の為に余計筋ばつて見える。それがニヤリと笑つた様
子といふものは、蜘蛛がね、二本づゝ足を揃へて、シユー
ツと伸びをすることがあるだらう正にあの感じだね。僕は
嘗つて、あんな醜惡な容兒を見たことがない。
普通の往来など、違つて、汽車の中、それも夜汽車の中
「など」では、小説などの聯想から「」そんな風に感じる
のかも知れないけれど、時々、非常に変つたものを見るこ
とがある。現実の世界とは、まるで違つた様子のものをね。
あの二人連れでもさうだ。車室の中は、多くは遠方へ旅
行する人を見て、夫々毛布などを被つて寝る用意をして
ゐる。殆ど話聲も聞えない。その中で、今の二人だけが、
いつまでも、ボソ／＼ボソ／＼やつてゐる「のだ」。そ

正にあの感じだね。僕は當うて、おんなを醜惡
 な容顏を見たと云ふ。普通
 普通は往來をい、違つて、汽車の中、そんな
 もの、汽車の中、車中では、小説などの醜惡から
 人々を風に変じ、のかし、知れぬいけい、時
 々、非常に変つたものを見ること加ふ。現
 実の世帯とは、まるで違つた様子の中、
 あの二人連中もでもさうな。車室の中は、
 多くは遠方へ旅行する人に見える。夫々毛布
 なを被つて寐る用意をしてゐる。誰と誰
 聲も聞えない。その中で、今の二人、大げさ
 かつまゐり、おろ／＼おろ／＼、あつて
 る。それか、おんなは、おんなは、おんなは、
 そんな、汽車が品川を通過してゐる。ま
 ても、僕はあつと二人の方を見つめてゐる。
 すると、その頃、あつと、おんなは、おんなは、
 は、背の高い方の男の、甚だ不気味な容
 貌があつた。そんな、背の高い方の男の、
 容顏つきに氣をとられてゐたのと、高い方が多く向ふを向いて
 ゐたのに、分らなかつたのだが、よく見ると、彼の顔つき
 が又、
 中から総髪に分け、太い眉の下に、妙に眼瞼の垂れ下がつ
 た細い目が、併し鋭く光つてゐる。扁平な、少し曲つた
 鼻、この鼻が実に特徴のあるもので、小鼻が開いて、それ
 が馬鹿に大きい為、鼻の頭に三つの頂点がある様に見える
 のだ。そして、大ぶりの口、頑丈な顎。何よ
 りもかしいのは、その鼻の下にね、今時殆ど見かけない、
 立派なカイズル髭のあることだ。
 君は、ランドルといふ、佛蘭西の有名な青髭のこと
 を知つてゐるだらう。あいつの写真を見たことがあるか
 ね。変装の巧みな男で、様々の写真があるけれど、その
 内の若造りの一つと、その時の背の高い方の男の顔と、氣
 のせいか瓜二つなんだ。目だとか鼻だとかは、可也違つ
 てゐるのだが、全体の感じが、殊に頭髪を眞中から分けた

れが、
 妙に氣になるんだね。

そんな訳で、汽車が品川を通過してしまふまでも、僕はぢ
 つと二人の方を見つめてゐた。すると、その頃になつて、
 ふと氣がついたのは、背の高い方の男の、甚だ「無」不氣
 味な容兒であつた。それまでは、低い方の男の醜惡極る顔
 つきに氣をとられてゐたのと、高い方が多く向ふを向いて
 ゐたのに、分らなかつたのだが、よく見ると、彼の顔つき
 が又、
 中から総髪に分け、太い眉の下に、妙に眼瞼の垂れ下がつ
 た細い目が、併し鋭く光つてゐる。扁平な、少し曲つた
 鼻、この鼻が実に特徴のあるもので、小鼻が開いて、それ
 が馬鹿に大きい為、鼻の頭に三つの頂点がある様に見える
 のだ。そして、大ぶりの口、頑丈な顎。何よ
 りもかしいのは、その鼻の下にね、今時殆ど見かけない、
 立派なカイズル髭のあることだ。

ブルベグド

君は、ランドルといふ、佛蘭西の有名な青髭のこと
 を知つてゐるだらう。あいつの写真を見たことがあるか
 ね。変装の巧みな男で、様々の写真があるけれど、その
 内の若造りの一つと、その時の背の高い方の男の顔と、氣
 のせいか瓜二つなんだ。目だとか鼻だとかは、可也違つ
 てゐるのだが、全体の感じが、殊に頭髪を眞中から分けた

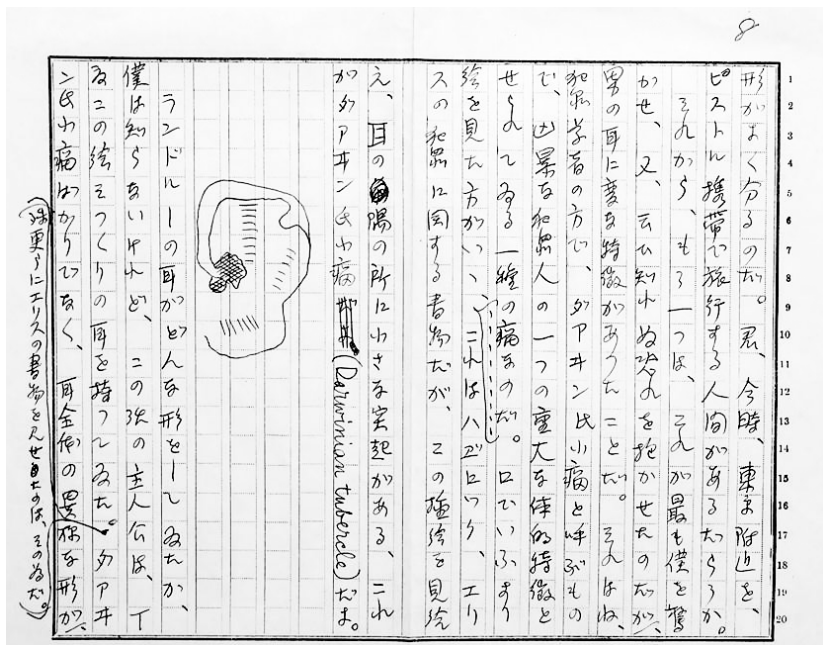
1 ひない。そんなとも、ひつしり混み合つてゐる
 2 から、皆寝ころびて、車室の中がいやにしん
 3 としてまり返つてゐる、その中で、ガビ
 4 ンと響いて来る車輪の音に、合奏す。
 5 探る二人の呼吸音、さうした事柄が、僅か
 6 分をまはしたのかも知れない。免も車、王の
 7 時の僅には、二人の異様な男の姿が、何か
 8 う非常に悪いことの前兆でもあつた。彼は思
 9 へば、たゞ顔形が月と外圓の悪人に見え
 10 たら、いふ大けのことであつたら、奇人、僕
 11 の腹にまはさうへゐても、そんなにはい
 12 氣にかかりはしなかつたのであらうか、段々
 13 の男を觀察してゐる内に、彼は、顔形以上
 14 に、色々不思議な事のあることを、氣附く程
 15 はあつたのか。その一つは、彼が物を飲め
 16 ばうつむいた時に、ふと氣がついたのが、
 17 その時モソコリ持上つた、靴の底のボケツト
 18 に、小型のピストルがまはつてゐたことだ。
 19 ピストルが張りつてゐた、外部からその
 20

所と、氣取つたカイゼル髭を生してゐる点が、妙なことだ
 けれど、僕は「ふと」「二刹那」、ランドルーといふ男が、
 まだ生きてゐて、日本人に変装し「て、そんな所に」て、
 この辺をうろついてゐるのではないかと思つた程、■それ
 程よく似てゐた。

ランドルーと云へば、すぐ思ひ出すのは、彼が數知れぬ
 女と結婚をしては、まるで日常の事務をでもとる様に、冷
 静にテキパキと、その女達を殺して行つた、あの、我々には
 逆も想像も及ばない、残酷極る処行である。その一つ一
 つ違つた、身震ひする様な殺人方法である。

「僕は」「そんなことを考へながら、」■目の前で、ボソ
 く／＼と囁き□してゐる、ランドルーに似た男を眺め「なが
 ら、」てゐると、眞実のランドルーの事績と、似た男の姿と
 が、ごつちやになつて、今「にも」その男が「」一人の婦
 人を殺して、東京のどこかのガラス工場の、眞赤に燃えて
 ゐる爐の中へ、「その」死骸を投げ込んで来たのだ、といふ
 様な、恐ろしい妄想さへ浮んで来るのだつた。

僕はその日、頭がどうかしてゐたのかも知れない。それ
 とも、びつしり混み合つてゐながら、皆寝て了つて、車室
 のなかいやにしんとしづまり返つてゐる、その中で、ゴロ
 く／＼と響いて来る車輪の音に、合奏する様な二人



の囁き聲、さうした事情が、僕の気分を変にしたのかも知れない。兎も角、その時の僕には、二人の異様な男の姿が、何かかう非常に悪いことの前兆でもある様に思れて仕方がないのだ。

だが、たゞ顔形が「ラン」外国の「極」悪人に似通つてゐるといふ丈けのことだつたら、なんぼ僕の頭が変になつてゐても、そんなにひどく気にはしなかつたのであらうが、段々その男を観察してゐる内に、彼には、顔形以上に、色々不思議な点のあることを、氣附く様になつたのだ。その一つは、彼が物を拾ふ為にうつむいた時に、ふと氣がついたのだが、その時モツコリ持上つた、彼の尻のポケットに、小型のピストルが這入つてゐたことだ。ピンと洋服が張り切つ「て」「た為に」、外部からその形がよく分るのだ。君、今時、東京附近を、ピストル携帶で旅行する人間があるだらうか。

それから、もう一つは、それが最も僕を驚かせ、又、云ひ知れぬ恐れを抱かせたのだが、「男の耳に変な特徴があつたことだ。それはね、犯罪学者の方で、ダアキン氏小瘤と呼ぶもので、凶暴な犯罪人の一つの重大な体的特徴とせられてゐる一種の瘤なのだ。口でいふより絵を見た方がい、……」これはハエロック、エリスの犯罪に関する書

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
 我々も、その書物にある、外國の犯罪人に、よく
 知らるゝのだ。
 ダアキン氏小瘤が犯罪人の一つの重大な特
 徴であることは、去りてエリスが痛めてゐる
 如かりではない。例のロンズは、それを、
 沢山の学者が、皆明言してゐる所だ。僕も、
 の房か、愈々怖くなつた。気がつくと、何と
 の方と、細い目じりと、眺めてゐる。何と
 も云へぬ、目だ。丁度、薄暗い叢の向から、
 かいつと獲物を睨んでゐる、あの蛇の目だ。
 その目を見つめると、ソツと身が竦む様
 子、一簇の動物の力を持つてゐる。其様子
 が、（例の蛇の中）まさか、えん、えん、と、
 まい、か、何だか今にもピストルを、つぎやうに、
 手に上らうといふ、言ひ出さうで、蛇に、
 味があるのか。
 汽車が、駅に着くまで、僕は、さうして、睨み
 あつてゐた。いや、何の、方、は、別に、そんな、後
 り、は、な、か、つ、た、の、か、も、知、れ、な、い、が、神、毛、蛇、に
 なつてゐた、僕は、何だ、時、々、後、を、う、り、向、く、様子

物だが、この挿絵を見給え、耳の■隅の所に小さな突起が
 ある、これがダアキン氏小瘤「だよ」(Darwinian tubercle)
 だよ。

ランドルーの耳がどんな形をしてゐたか、僕は知らない
 けれど、この話の主人公は、丁度この絵そつくりの耳を持
 つてゐた。「殊更らにエリスの書物を見せ■たのは、その為
 だ。」ダアキン氏小瘤ばかりでなく、耳全体の異様な形が
 「」「エリスの書物にある」「妙なこともあるものだね」
 「この」外國の犯罪人に、よく似てゐるのだ。

ダアキン氏小瘤が犯罪人の一つの重大な特徴であること
 は、決してエリスが論じてゐるばかりではない。例のロン
 プローを始め、沢山の学者が、皆明言してゐる所だ。僕
 はその男が愈々怖くなつた。気がつくと、彼は「先程から」
 僕の方を、細い目でジロ／＼眺めてゐる。何とも云へぬ凄
 い目だ。丁度、薄暗い叢の間から「」ぢいつと獲物を睨ん
 でゐる、あの蛇の目だ。

それに見つめられると、ゾ■ツと身が竦む様な、一種の
 動物的な力を持つてゐる。其様子がね、「まさか」満員の列
 車の中でそんな「と」もあるまいが、何だか今にもピス

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

ろに、見つめられると、やりと身が疎まな
 一種の動物的な力を發つてゐるやうだ。その様
 子から、まさか彼等の列車の中で、そんなこ
 とをいふわけない、何か今にもピエセル
 をつかうて、「手を上げろ」といふやうにさ
 ういふ、姉は氣味が悪かつた。
 併し、無論そんな僕の神経で、汽車が〇駅
 に着き、彼等がそこで下車してゐるまで、別
 段の出来事もなく済んだ。それを見ると、僕
 は一方ではホツとしながら、他の一方では、

トルをつきつけて「手を上げろ」でも云ひ出しさう
 で、妙に氣味が悪いのだ。

汽車が〇駅に着くまで、僕〔等〕はさうして睨みあつて
 ゐた。いや、彼の方では別にそんな積りではなかつたのか
 も知れないが、〔可也〕神経的になつてゐた僕は、彼が時々
 後をふり向く様子

それに見つめられると、ゾツと身が竦む様な一種の動物
 的な力を持つてゐるのだ。その様子がね、まさか満員の列
 車の中で、そんなこともないのだけれど、何だか今にもピ
 ストルをつきつけて、「手を上げる」とでも云ひ出しさう
 で、妙に氣味が悪かつた。

併し、無論それは僕の神経で、汽車が〇駅に着き、彼等
 がそこで下車してゐるまで、別段の出来事もなく済んだ。
 それを見ると、僕は一方ではホツとしながら、他の一方で
 は、

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
 切角の獲物を逃した様な気がして、何となく残り惜かつた。若し帰りを急がないのだつたら、そこで下車して、彼等の後を追ひ度い程に思つた。なぜといつて、「前に述べた様な」色々な点から考へて、彼等は何かの犯罪者には相違なかつたのだから。
 て、彼等は何かの犯罪者には違へた様な音には相違なかつたのだから。
 その時、耳といふもの、どういふ訳か、僕はその時の男の容兒を、殊に例のダアキン氏小瘤のある変な格好の耳を、忘れることが出来なかつた。「彼等は一体何者であらう。犯罪者とすれば、どんな種類の犯罪者であらう。」時とする、その「不■氣味な」耳を、「私は」「僕は」夢にまで見た「程だ」。
 見た程だ。
 僕は一年何者であらう。犯罪者とすべし、人を殺した程だ。
 柳井、若しニ小か、たつた一度の邂逅であつたら、こんなお話の材料も出来なかつたのであらうが、どうした廻り合せか、僕は暫く間を置いて、■「その後二度も、甚だ奇妙な事情の下に」「その男を見」「たのである。」ることになつた。
 前の話から一ヶ月余り後のことだ。ある日「」もう町には燈火がついて、人顔もさだかならぬ黄昏時であつたが、横浜のI町、あの繁華な通りを歩いてゐて、僕はふと妙な

切角の獲物を逃した様な気がして、何となく残り惜かつた。若し帰りを急がないのだつたら、そこで下車して、彼等の後を追ひ度い程に思つた。なぜといつて、「前に述べた様な」色々な点から考へて、彼等は何かの犯罪者には相違なかつたのだから。
 それ以来といふもの、どういふ訳か、僕はその時の男の容兒を、殊に例のダアキン氏小瘤のある変な格好の耳を、忘れることが出来なかつた。「彼等は一体何者であらう。犯罪者とすれば、どんな種類の犯罪者であらう。」時とする、その「不■氣味な」耳を、「私は」「僕は」夢にまで見た「程だ」。
 「だが、」若しこれが、たつた一度の邂逅であつたら、こんなお話の材料も出来なかつたのであらうが、どうした廻り合せか、僕は暫く間を置いて、■「その後二度も、甚だ奇妙な事情の下に」「その男を見」「たのである。」ることになつた。
 前の話から一ヶ月余り後のことだ。ある日「」もう町には燈火がついて、人顔もさだかならぬ黄昏時であつたが、横浜のI町、あの繁華な通りを歩いてゐて、僕はふと妙な

